

在所の方から学ぶ野洲川流域調査

守山 FS 研究員 藤井 美穂

はじめに

現在、「河川の治水と利水をめぐる公共事業と住民の知恵」というテーマで、滋賀県の野洲川流域の農村を事例に、河川の治水をめぐる公共事業によって農村社会はどのように変化を余儀なくされ、それを地域住民がいかに克服していったのかを研究している。

滋賀県守山市開発（かいほつ）に住み、同地域の土地改良組合に関わってきた A さん（84 歳、男性）に、同地域を案内していただき、野洲川改修事業、土地改良事業および集落の暮らしについて話をうかがっている。

ここでは、開発集落の調査をとおして、地域研究を専門とする私が在所の方々から学んだ多くの「気づき」の一部を紹介したい。こうした「気づき」の蓄積は、今後、どのような実践型地域研究を地域の人々と研究者が共同で行っていくのかを考えていく契機になると考える。

A さんとの出会いと調査方法の変化

現場では、「わしはこの土地で生まれ育って 80 年や。それで、ここのことがちょっと分かってくるんや」という A さんには記憶に鮮明なポイントがいくつかあり、私はそれを写真に撮っている。被写体を選ぶのはあくまでも A さんであり、私は写真を撮るだけである。写真を撮り終わると、A さんが撮影した場所について、何故その場所を撮影してほしいと思ったのか話してくれるので、それをメモに残している。

写真撮影は、2 回目の調査の時、「あんた、ええカメラもってんな。ちょっと、これ撮ってくれへんか」と A さんに言われてから始まった。最初の被写体は、A さんの在所にある乙爾乃（こじの）神社の若宮とそれを囲んでいる低い丸石の石垣だった。撮影後、A さんは、この若宮は太平洋戦争で戦死した在所の方を祀っており、彼の兄も祀られていると話してくれたのである。1955 年、この若宮が建てられた時に、遺族会の人たちが、戦死した人に思いを馳せて、川から石を一つずつ拾ってきて積み上げたという。私にとってはどこにもあるような石垣だし、研究テーマとは全く関係がない。しかし、その石垣には、A さんや在所の人たちの大切な思いが込められていたのだ。

A さんに頼まれて写真を撮影する際に、その理由を聞いたり、撮影後に説明を求めたりしなかった。撮影者は私だが、被写体に A さんの思いが込められていると察するようになったからである。その後、A さんと一緒に彼の友人の家、寺社、石碑、農地、旧野洲川堤防跡などを訪れて写真を撮った。上に述べた神社で A さんに被写体について性急に質問をしたら、A さんの協力を得ることはおろか、写真撮影はできなかつただろう。



写真1 灯明で飾られた菜蒔盆



写真2 集落の各組の菜蒔盆への思いが書かれている



写真3 菜蒔盆に飾られた若宮

写真1~3 「菜蒔盆あるさかい写真頼むわ」。Aさんから写真撮影を依頼された菜蒔盆(2009年9月20日撮影)

撮影した後、Aさんは私に必ず質問する。例えば、川の小型堰を撮影した後、かつて堰があった場所から現在の位置に移された理由を問われた。すぐに回答を与えてくれないのだ。「あんた、なんも分かってないな」というのが私に対するAさんの思いやりのある口癖だ。

研究者が調査資料にならないとみなすものが、当該地の人々にとって重要な意味があるという自明なことを、Aさんに手伝っていただいて写真を撮るたびに具体的に突き付けられている。

研究者は、現地で自分の研究テーマを探すのに忙しい。一般に、何らかの理論で現地調査から得た情報を「ふるい」にかけている。それは研究者の一方的な都合ではないだろうか。そして、研究者の論理だけが一人歩きをして、研究者が読むための論文を書く。研究成果は、研究者だけのものとして共有されるが、調査地で話した人たちと分かちあうことはほとんどない。だから、論文には調査地の人々の顔がなかなか見えてこない。

「何故、多くの論文には、村で関わった人たちの顔が見えてこないのだろうか」。

長年、私のなかでくすぶっているこうした自分自身の研究と調査方法に関する問いに対して、先に述べた A さんと共に行う写真撮影と調査の方法は、在地の人びとが「ふるい」にかけて情報を、研究者が得るといった一つの新しい取り組みといえよう。

在所への思い

「わしは体が動くまで、ずっとコメをつくるんや。戦争中の食糧難のことが死ぬまで体にしみついとる」。現在、A さんは、7 反（1 反は 10 アール）の水田と 6 反の畑を耕作している。毎日、早朝から昼過ぎまで畑に行き、スイカ、カボチャ、スイートコーン、ササラゴボウ、トマト、ナスビ、サツマイモをつくってきた。守山市の聴覚障害者助産所の「みみの里」の数人の聴覚障害者の方を農作業のアルバイトとして雇っている。農業の経験がない方もいるため、一から教えなければならぬこともあるという。だが、A さんは煩をいとわない。「在所に世話になったもん（者）が恩返しをするのは当たりまえのことや」と語る。

これまでの調査の過程で、在所の人々が「在所に世話になる」こと、そして「在所への恩返し」という「在所への思い」を抱いていることが、少しではあるが感じられるようになってきた。

最初に、「河川の治水と利水をめぐる公共事業と住民の知恵」というテーマで研究をしていることを述べたが、こうした A さんたちの「在所の思い」を「住民の知恵」と一括していいのか問いなおしている。

雨が降るなか水田の用排水路を 1 つずつ歩き写真を撮り終わった後、「あんた、こういう地道なことは目立たへん。そやけど長持ちするんや。わしの経験からやけどな」。調査のたびに、A さんから心に響く言葉をいただき、懐の深さを感じ入る。こうした A さんが世話になり恩返ししたいという在所とはどういう所なのか考える契機を、A さんから与えられた。

野洲川流域にある水害に関する史跡を前にして

A さんは、選んだ被写体に対して、選択した理由をいつも話されるとは限らない。野洲川流域にある水害に関する史跡では、A さんはほとんど何も語らなかった。

水害の史跡はおおよそ 3 つに分類できる。

1 つ目は、防災祈願や水害からの復旧を願って建立されたり、植樹されたりしたもので、3 つのうちで一番多く見られる。神社が 2 か所、祠が 1 か所、そして神社などの植樹が 2 か所ある。ほかに、水災記念碑がある。これは、1913 年 10 月、台風によって増水した野洲川が、笠原町で決壊し、死者 32 名の被害がでたことを忘れないように、再び悲惨な水害を繰り返させないようにと願いを込めて建てられた。

2 つ目は、水害にあたり殉職したりした人々を弔った碑であり、3 つ目は、水害対策に尽力した人々をたたえた碑である。双方とも、2 つの碑があった。

この地域に生まれ育ち、野洲川とともに生活してきた A さんは、これらの史跡の石碑に触れ、碑文をじっくりと読んでいる。「これも写真撮っという」と告げるだけで、A さんは何も語らない。私にとって、野洲川流域の水害の史跡は、災害が繰り返されてきた地域の人々の苦闘や防災の祈願を知る手掛かりになる。だが、各々の史跡は、A さんのなかに深く沈潜している水害の記憶を確認させるものなのだろう。

史跡の前にたたずむ A さんの静かな沈黙を、私自身がいかに感じ、読み取ることができるのかが問われていると思う。

すでに A さんと撮影した写真は約 200 枚におよぶ。今後、その写真を撮った場所を各年代の地図で A さんとともに確認し、A さんの生活史および地域の歴史を検討するための資料を作成する予定である。